

031

## 車社会を前提に 地域全体で津波避難ルールを具体化

#地域防災力

取組主体

白保公民館

従業員数

想定災害

実施地域

—

地震等

沖縄県

車社会という地域特性を前提に、住民参加の話し合いや訓練を通じて車避難を含む津波避難ルールを具体化し、災害時に迷わず行動できる地域の備えを整えている。

### 1 取組の概要

- 沖縄県では、住民が運営する自治組織を「公民館」と呼称する。島嶼部からなる八重山地域に位置する石垣市白保地区では、白保公民館が石垣市と連携し、地域の生活環境の維持や防災において重要な役割を担っている。本事例では、白保公民館による避難計画の作成を取り上げる。
- 津波からの避難は原則徒歩避難であるものの2024年に波警報が発表されたとき、石垣市内で大規模な渋滞が発生した。このことから2024年からワークショップや訓練を継続し、避難計画の作成を進め、白保公民館では車避難を前提とした避難計画を策定している。
- ワークショップでは津波避難行動のベスト10を挙げ、車での避難方法や高齢者の避難方法等の重点項目について議論している。車社会であることを踏まえ、渋滞を避けるために地区を縦割りにして避難先を3カ所に分散させ、国道に出たら左折し、高台方向に向かうなどのルール作りを行っている。また、訓練参加車両はライトを点灯するなど、実効性のある避難計画の策定を目指している。



ワークショップの様子



避難訓練の様子

#### 《取組の検討・実施体制》

- 白保公民館と自主防災会が中心となり、石垣市と連携して津波避難計画づくりを進めている。
- また、白保地区には石垣市消防団白保分団があり、石垣市では数少ない独自の出張所を持つ組織として支援団体の位置づけで協力している。

### 2 取組が始まった経緯・背景

- 2024年に台湾東部沖を震源とする地震によって津波警報が発表された時、石垣市内で大規模な渋滞が発生したことが直接のきっかけとなった。白保地区では比較的渋滞は少なかったものの、市全体での課題を受け、車両での避難訓練の必要性が認識された。これを受けて石垣市は車両での避難訓練を計画し、白保地区でも車両のルートを決めて訓練を実施することになった。
- もともと白保公民館には自主防災組織があったが、訓練方法がわからないなどの理由で活動が停滞していた。昨年からワークショップを開催するようになり、人が集まるようになってきたことで避難計画書作成への機運が高まった。

### 3 取組による効果・成果

- ワークショップを通じて、車避難のルールが具体化された。地区を班ごとに分け、渋滞を避けるために三方向に分散して避難する計画が立てられた。特に国道から下の村の住民は国道に出たら左折し、高台方向へ向かうルールが設定された。また、訓練参加車両はライトをつけることで、参加者と非参加者を区別し、交通誘導員が安全を確保する工夫も導入された。

- 参加者の意識変化が見られた。当初は義務感で参加していた住民も、講師の話に興味を持ち、積極的に議論に参加するようになった。特に多様な世代が参加することで、異なる視点からの意見が出され、議論が活性化した。
- 高齢者の避難方法について「家の外に出てきたら誰かの車に乗せてもらう」といった具体的な対応策も話し合われた。高齢者は自力での避難が難しく、車も持っておらず荷物も持てないという課題がある。日頃からの声かけの重要性や、家の中に誰がいるかを確認する時間的余裕がない災害時には、まずは外に出てもらうことが優先されるという現実的な対応策が共有された。
- 特に子どもや高齢者の不安に対応するため、明確な避難ルールを地域全体で共有することの重要性が認識された。

#### 4 周囲の声

- 高齢者から避難方法についての質問が多く寄せられている。家族がいない高齢者は不安を抱えている。特に 80 代の住民は過去の地震経験から防災意識が高い傾向にある。一方で、30～60 代の現役世代は参加が少なく、防災訓練への参加率も低い状況である。

#### 5 直面した課題と対応

- 観光客への対応も課題として認識されている。白保集落内の民宿には避難計画の説明が必要とされ、チェックイン時に避難方法を伝えるよう依頼している。しかし、観光で訪れただけの人々への情報伝達は難しく、緊急時に地元住民とは異なる行動をとる可能性がある点が懸念されている。
- 避難計画を住民に周知し、実際の災害時に計画通りに行動してもらえるかという点も不安要素となっている。全世帯に簡単な計画書を配布したものの、実際に読まれ、理解されているかは不明である。特に訓練に参加していない住民が災害時に適切な避難行動をとれるかどうかが見えないため、不安が残っている。

#### 6 今後の展望

- 避難訓練の継続と検証を通じて、避難計画の精度を高めていく予定である。特に車避難のルールを徹底し、渋滞を避けるための工夫を重ねていく。具体的には、国道から下の村の住民は国道に出たら高い方向（左側）に進み、班ごとに避難場所を割り振ることで交差点での混雑を防ぐ対策を実施している。

#### 担当者の声

担当者自身も消防団員として活動しており、様々な地域行事や団体（保存会等）に関わっている。その経験を活かして、今後も人集めや組織間の連携に協力していきたいと考えている。東日本大震災当時、小学 1 年生だった息子が、津波警報を聞いて 1 人で 1 キロ離れた高台まで避難していたことがあった。その経験から、子どもや高齢者が不安なく避難できる明確なルールづくりと共有の重要性を強く認識している。

問合せ先	動画	サイト URL
白保公民館 フォーム： <a href="https://sites.google.com/view/shiraho-official/inquiry?authuser=0">https://sites.google.com/view/shiraho-official/inquiry?authuser=0</a>	—	—

#### 《本事例のポイント》

白保公民館では、車社会である地域特性を踏まえ、車避難を前提とした津波避難計画づくりを進めている。ワークショップを通じて住民同士が議論し、地区を分けて避難先を分散させるルールや、高齢者の避難方法等を具体化した。訓練を重ねながら現実的な避難行動を共有することで、災害時に迷わず行動できる地域の備えを整えている点が本事例の特徴である。